

題名 明石うらぎよきょうのたんけん

作者名 三和 倫太郎(みわ りんたろう)

学校名 明石市立明石小学校

学年 一年

「カラカラカラカララン」たかくてするどいかねの音がひびいて、十一時に明石うらのせりがはじまった。木のはこに入った大きなサワラがすべってくる。せり人が前に立って、きんぞくのぼうでドンドンとリズムをつけながら、じゅもんみたいなことばを言っている。すぐに魚やさんたちが、しゅわみたいにゆびでいろんなかたちをつくって見せる。きづいたら、もうつぎの魚、そのつぎの魚のせりになっている。みんなこわいくらいのいきおいで、とてもはげしくて、ぼくはドキドキした。

なつやすみがあとすこしでおわってしまう八月二十三日、ぼくはおかあさんといっしょに、明石うらぎよきょうどうくみあいの見学にきた。ずっとたのしみしていたので、うみの方じてんしゃをこぎながらワクワクした。すこしまよって、ギリギリセーフではじまりのじかんにまにあった。はれていてとてもあつかったので、あせびっしりだった。

まず、二かいのへやで、明石うらぎよきょうのくみあいちょうのえびすもとさんのはなしをきいた。明石のうみでとれる魚のこと、せりのほうほう、せりを見学するときちゅういすることなど、しらないことがたくさんあった。明石のうみでとれる魚は、魚やさんやスパーで見たり、いえてたべたりしている魚が多かった。でも、「明石のしゅん」があつて、ほかのところとはちがうこともあるのはしらなかつた。せりのことは、しらないことばかりだった。せりを見るのははじめてなので、どんなところでどんなかんじなのか、この時はまだよくわからなかつた。でも、むずかしいゆびのあんごうがあることと、せりのじゃまをしてはいけないことはわかつた。

そのあと、いよいよせりの見学だ。えびすもとさんといっしょに外に出ると、たくさんのトラックがとまっていた。ながぐつをはいたおじさんたちが、だいしゃで水色のかごをはこんでいる、フォークリフトもうごいでいる。どんどんあるくと、おふろみたいなきまはここに水がジャバジャバ入れられてあふれていた。「そろそろせりの時間だからいきましよう。」と言われて、せりのぼしょにいく。まっかなガシラがいったかごの間をおつて、水びたしのみちをとおつて、みじかいだんにのぼつた。そのしゅんかん「カラカラカラカララン」とかねの音がひびいて、せりがはじまった。せりをすすめるやくの人を「せり人」という。せり人が前に立って、まわりには魚をうごかすかかりの人と、せりのきろくをするかかりの人がいる。魚の台がまん中にあつて、せり人とむかいあつたきんぞくのかいだんにたくさんの魚やさんがならんで立っている。ぼくは「入学しきで、みんなでならんでしゃしんやさんにしゃしんをとつてもらつた時みたいだ」とおもつた。たのしみしていたせりの見学は、すごいはくりよくで、きんちょうした。せりのぼしょは「せりば」、せりをしてるだいは「せりだい」とよばれる。せりだいの右から木のはこに入った魚が出てくる。

さいしょに出てきたのは、ぎんいろのサワラだ。大きくてギラツとひかっている。せり人が「てかぎ」というきんぞくのぼうでせりだいをドンドンとならし、リズムをつけながら、じゅもんのようなことばを言っている。すぐに、かいだんに立った魚やさんたちが手をあげて、しゅわみたいにゆびで形をつくる。これは、魚のねだんをゆびで言っているそうだ。ぼくも、ゆびですうじをつくるほうほうをおしえてもらったけど、むずかしくておぼえられなかった。ぎんいろのサワラ、ぶあついハマチ、ぼくのかおよりもっと大きいカレイ、まっかなガシラ。しんせん魚がどんどん出てくる。おじさんたちはみんなしんけんで、大きなこえで、すごい早さでじゅもんを言ったり、しゅわをしていた。ぼくは、きんちようして、じつと立って見ていた。えびすもとさんが、「つぎのグループにこうたいしましょう」と言うのがきこえて、ほっとした。あとで、おかあさんが「あのせり人のおにいさんは、せり人の一年生なんだって。」と言ったのでびっくりした。一年生ということは、せり人になってすこししかたっていないし、まだべんきょうのとちゅうということだ。ぼくも一年生だけど、あんなふうみんなの前で、どうどうとなにかをするじしんはない。しゅもんしたいことがいっぱいだ。今日のせりでいちばんたかかった魚はマコガレイで、一ぴきで二万円だったそうだ。

つぎは、せりばのよこにある「プール」の見学をした。「プール」は、学校のプールとはぜんぜんちがう。コンクリートのゆかで、水色のはこがぎっしりとならんでいて、はこのうえに水色のバケツがのっている。バケツには、魚とかい水が入っている。生きている魚もいるし、しめられた魚もいる。ゆかはい水があふれて水びたしだ。魚たちはならんで、せりのじゅんばんまちをしている。明石うらでは、魚を生きたまませりにかけるので、しんせん魚をさかなやさんがかうことができるそうだ。プールには、体ぜんぶがながづつみたいなズボンとエプロンがあったいしたようなふくをきているおじさんやおばさんが水の中をバシャバシャあるいている。「おとうちゃんがかうみでとった魚を、おかあちゃんがはまでうるというやくわりぶんたんが、むかしからあります。」とえびすもとさんがおしえてくれた。水色のはこのよこで、おばさんたちがおしゃべりしていた。すぐそばで、すごいはくりよくのせりをしているのに、ここはのんびりしているように見える。魚も人も、うみでりょうの時にがんばってたたかかって、このあとのせりのじゅんばんまちがくるまで、「プール」できゅうけいしているのかな。今日は天気がよくて魚がいっぱいとれたから、プールにはたくさん魚がいるんだそうだ。うみがあれて、魚があまりとれない日もある。今日がはれてよかった。

見学をした八月二十三日は、さいこうきおんが三十六どのもうしょ日だった。プールやせりばのゆかは水びたしで、ぼくのくつもすこしぬれた。あつかったし、すぐにかわいたから気にしなかった。でも、いえにかえってから、もしさむい日もプールが水びたしだったらつめたいだろうなとおもった。さすがにふゆは水はながさないのかな。でも魚はかい水がなかったらよわってしまうのかな。しゅもんしたかったけど、あとからきづいたので、おかあさんに言うのと、えびすもとさんにメールでしゅもんしてくれた。すると、「ふゆでもおなじようにゆかに水がたくさんあります。さむくてつめたいです。」とすぐにへんじがきた。魚を生きたまま、魚やさんやたべる人にとどけるために、たいへんなくろうがあるのがわかって

びっくりした。

プールを見学しているとき、タコとタイをさわらせてもらった。まずはタコ。ゆかに出されたタコは、ものすごい早さでうみの方にスルスルスルとあるいてにげだした。すべっているみたいで、八本のあしを上手にうごかしている。さわるとヌルヌルとろとろで、スライムみたいだった。きゅうばんはかたくて、あしや体はふにやふにやわらかくてぜんぜんつかめない。ゆでたタコはプリツとしているのに、生きているタコはやわらかくて、ふしぎだと思った。タコは、りょうしさんがタコつぼをしかけてつかまえていると思っていたけれど、じつは明石ではタコつぼりょうしはほとんどしていないことをはじめてしった。そこびきあみりょうでとっているそうさだ。タコは、ぼくたちがみんなでがんばってつかまえて水そうでもぜんぜんつかまえられなかった。でも、えびすもとさんがひよっつかまえて水そうにもどしてしまった。あんなに上手にタコをつかまえられるなんて、めっちゃくちゃかっこいい。つぎはタイ。タイはしめられていたので、うごかなかった。体じゅうにびっしりとうろこがあつて、かたかった。えらのうしろに、ひらひらした赤いひもみたいなのがついていた。口にはとがったはがたくさんあつて、したもみえた。タイのうろこが一つ、ぼくの手についた。タイは赤いのに、うろこはとうめいだった。赤いかわのタイが、とうめいなうろこのふくをきいているみたいでおもしろいなと思った。

明石うらでせりにかけられる魚のうち、明石のおみせにいく魚は、三十パーセントくらいだそうさだ。ほかの魚は、とうきょう、なごや、おおさかにおくられる。ほっかいどうやきゅうしゅうにはこぼれる魚もいる。明石のおいしくてしんせんな魚は、日本ぜんこくでたべられているんだな。そんなとくべつな魚を、すぐにかつてたべられるなんて、明石にすんでいゝるぼくはしあわせだ。もつともつと日本人みんなに、明石の魚のおいしさをしつてもらいたい。でも、そうすると人気がでて、ぼくがたべる分がへってしまうのかな。

さいごに、りょうしさんや魚やさん、せり人にしつもんをさせてもらった。ぼくが一ばんきょうみしんしんだつたのは、せり人一年生のいとうさんだ。もともとせりにきょうみがあつたから見学会にきたし、ぼくもおなじ一年生だから、きいてみたいことがたくさんあつた。せり人のいとうさんは、せり人になる前はせりのてつだいなどをしていたそうさだ。せりばに魚を出したり、魚のかごをせりりするしごとだ。せり人のすがたがかつこよかつたからせり人になつたそうさだ。半年かかつてせり人のべんきょうをして、今もしゅうに三かい、二十分ずつべんきょうをしているとおしえてくれた。ふつきんとはいきんをきたえて、大きなこえを出すれんしゅうをしたりもしているそうさだ。たくさんの魚やのおじさんたちの前で、あんなにどうどうとせりができるのは、きつといっぱいべんきょうしているからだと思つていたのに、ぼくの方がべんきょうじかんがながくて、びっくりした。大人はべんきょうのじかんがみじかくても、いろんなことが上手ですごいなと思つた。いとうさんは、あさ九時にせりばにきて、りょうしさんのてつだいで、ふねから魚をおろしたり、プールにはこんだりする。十一時からせりをする。せりのあとは、ぎよきょうがかつた魚のしゅつかじゅんびをし、せりばやプールをかたづけ、ゆうがた四時半にしごとがおわる。水よう日と日よう日

は休みで、休みの日はつりに行っているそう。魚が大きいんだなと思った。せりの時に言っていたじゅもんみたいなことばのひみつをおしえてもらった。あれは、せり人がきめた魚のねだんや魚のとくちようを手とこえで魚やさんにつたえていたそう。」「つり(でとれた魚)やからきれいやで」とか「ごちあみの魚やで」とか、魚やさんがねだんをつけやすいように、魚のことをすばやくおしえなければいけない。だから早口になって、じゅもんみたいにきこえるようだ。せり人をしていてむずかしことは、魚のねだんをきめること、たのしいことは、せりで魚のねだんがどんどん上がっていくこと、とおしえてもらった。せり人によって、同じ魚でもねだんがちがうことがあるらしい。せり人もテクニクがあるんだ。いとうさんが二年生や三年生になって、せりがもつと上手になってしまったら、魚がたかくなつて、ぼくがたべている魚のねだんもあがってしまうのかな。それはこまるな。

見学がおわつてかえるとき、いとうさんがりょうしさんたちと、かんコーヒーをのみながらたのしそうにしゃべっていた。りょうしさんやせり人やおさかなやさんは、ともだちとどんなはなしをするのかな。いとうさんはせりの時、はげしくてこわいくらいのいきおいで、きびしいかおをしてじゅもんを言っていた。でも、ぼくのしつもんにこたえてくれた時やともだちとはなす時は、やさしそうでにこにこわらっていた。大人がしんけん、見学にきたぼくたちのことなんてかんけいなく、いつもとおなじようにしごとをしているのを、あんなにちかくでじっと見たのは、はじめてかもしれない。ぼくのおとうさんも、しごこの時には、あんなにしんけんがかっこいいかおをしているのかな。こっそり見てみたい。ぼくは大人になつたら、いとうさんみたいに、しんけん、たのしそうにできるしごとがしたいと思った。明石うらぎよきょうの見学は、たんけんみたいだった。ドキドキわくわくして、はじめてしつたことやかんがえたことがたくさんあった。ぎよせんの中を見学したこと、のりのようにくのはなし、りょうのほうほう、りょうしさんにきいたはなし、ほかにわたのしかつたことやもつとしりたいことがいっぱいだった。ぎよきょうのたんけんは、ぼくのなつやすみさいごの、さいごのぼうけんになった。

つぎの日、おかあさんといっしょに、うおのたなに魚をかいにいった。ハマチやカレイやガシラ、シタビラメ、ヒイカ、タコ、アナゴがざるに入つてうられていた。魚やさんのおじさんに、「せりとぎよせんを見学してきました。」とはなすと、すこしせりのことをおしえてくれた。せりで、魚やさんが「ぜったいかいしたい」と思ったら、ひじをまげて、ぐいっとひきよせるみたいに手をうごかしてアピールするそう。」「ちよつとでもおくれたら、おそい！ ゆうて、おこられるんやで」とふじながせんぎよてんのおじさんはわらっていた。あんなに早口でせり人がはなすことをきいたり、魚のことを見てすぐにかうかかわないかをきめたり、ねだんをつけたり、いちどにいろんなことをしなければいけない魚やさんはたいへんだ。ぼくは、きつとせり人や魚やさんは、さんすうがとくいで、すぐあたまと目と耳がいい人たちなんだと思った。魚やさんならんでいる魚が、いつもよりもつとおいしそうに見えて、大きなシタビラメを二びとハマチを一びかっでもらった。

きょうも、マンシヨンのベランダからうみにうかんでいるふねがたくさん見える。あのふ

ねには、はなしをきかせてくれたそびきあまりようしさんがのっているのかな。あっちのふねは、小さいから一人のりのつりぎよせんかな。きょうはどんな魚がとれたのかな。ぎよせんのいけすにいっぱいとれていたらいいな。プールには水色のかごがずらあつとならぶんだろうな。せり人一年生のいとうさんは、きょうも十一時からしんけんなかおでじゅもんを言つてせりをするんだろうな。いつも見ていたうみだけど、ぎよきょう見学に行った日から、まえよりもいきいきしているみたいに見える。いせいのいいこえがきこえてきそうながする。ぼくは、今日も明石のおいしい魚をもりもりたべて、明石のぎよきょうをおうえんしたい。

さんこうぶんけん

「目で見える明石のさかな」

山崎清張著

神戸新聞総合出版センター